

# 「サピエンス全史」(3/5)

文明の構造と人類の幸福

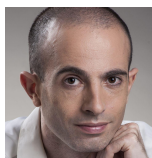
ユヴァル・ノア・ハラリ著

柴田裕之 訳

河出書房新社 2016年9月初版発行

2020年4月79版発行

(まんが版)



著者についての詳細は

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ユヴァル・ノア...>

ネットで「サピエンス全史」を検索しても、要約や図解が多数チェック出来ます。

## (上巻)

### 第1部 認知革命

- 第1章 唯一生き延びた人類
- 第2章 虚構が協力を可能にした
- 第3章 狩猟採集民の豊かな暮らし
- 第4章 史上最も危険な種

### 第2部 農業革命

- 第5章 農耕がもたらした繁栄と悲劇
- 第6章 神話による社会の拡大
- 第7章 書記体系の発明
- 第8章 想像上のヒエラルキーと差別

### 第4部 科学革命

- 第14章 無知の発見と近代科学の成立
- 第15章 科学と帝国の融合
- 第16章 拡大するパイという資本主義のマジック
- 第17章 産業の推進力
- 第18章 国家と市場経済がもたらした世界平和
- 第19章 文明は人間を幸福にしたのか
- 第20章 超ホモ・サピエンスの時代へ

今回は第3部を要約してお届けします。

### 第3部 人類の統一

- 第9章 統一へ向かう世界
- 第10章 最強の征服者、貨幣
- 第11章 グローバル化を進める帝国のビジョン
- 第12章 宗教という超人的秩序
- 第13章 歴史の必然と謎めいた選択

## 第三部 人類の統一

### 第9章 統一へ向かう世界

農業革命以降、人間社会は次第に大きく複雑になり、社会秩序を維持している想像上の構造体も精巧になっていった。神話と虚構のおかげで、人々はほとんど誕生の瞬間から、特定の方法で考え、特定の標準に従って行動し、特定のものを望み、特定の規則を守ることを習慣づけられた。こうして、人間は人工的な本能を生み出し、そのおかげで歴大な数の見ず知らずの人どうしが効果的に協力できるようになった。この人工的な本能のネットワークのことを「文化」という。

20世紀前半には、学者たちは次のように教えた。どの文化も永遠に特徴のある本質を持ち、完全で、調和していると。この見方は、文化は放っておかれれば、変化しないで、ひたすら同じ速度で、同じ同じ方向に進み続け、外から力が働いたときだけ変化すると。だが、今日では文化を研究している学者の大半はその逆が真実であると結論している。どの文化にも典型的な信念や規範、価値観があるが、それらはたえず変化していると。自らの内的ダイナミクス(変化力)のせいで変遷する。生物学的に安定した環境に、完全に孤立して存在している文化でさえ、変化は免れない。

中世ヨーロッパの貴族は矛盾する「キリスト教(他利的)」と「騎士道(利己的)」の両方を信奉していた。この矛盾が完全に解決されることはなかったが、解決の試みの一つが十字軍の遠征だった。善き騎士は善きキリスト教徒であるとした。

近代の政治秩序もまた、同じく、フランス革命以降、世界中の人々が平等と個人の自由の両方を根本的な価値と見なすようになったが、この二つも矛盾する。1789年以降の政治史はこの矛盾を解決しようとする一連の試みだったと考えることができる。

チャールズ・ディケンズの小説「オリバー・ツイスト」やアレクサンドル・ソルジェニーツインの小説「収容所列島」はこの矛盾を描いている。

[オリバー・ツイスト - Wikipedia](#)

[収容所群島 - Wikipedia](#)

現代アメリカ合衆国の政治もこの矛盾を中心に回っている。民主党は貧しい人や高齢者、虚弱な人を助けるために増税しても、より公平な社会を望んでいる。共和党は富める者と貧しい者の格差が増大したり、多くの人が医療保険に出来なくなっても、個人の自由を最大化したいとする。

現代社会は中世の「キリスト教」と「騎士道」との折り合いをつけられなかったように、「自由」と「平等」との折り合いを付けられないでいる。だが、これは欠陥ではない。このような矛盾はあらゆる人間文化にある不可分の要素なのだ。それは文化の原動力であり、種の創造性と活力の源泉でもある。思考や概念や価値観の不協和音が起こると、再評価し、批判することを余儀なくされる。

緊張や対立、解決不能なジレンマがどの文化にとってもスパイスのような役割を果たすとしたら、どの文化に属する人間も必ず、矛盾する信念を抱き、相容れない価値観に引き裂かれることになる。これはどの文化にとっても本質的な特徴で、「認知的不協和」と呼ばれる。

#### 認知的不協和 - Wikipedia

認知的不協和は人間の心の欠陥と考えられることが多いが、実は人間には必須の長所なのだ。矛盾する信念や、価値観を持てなかつたら、人類の文化を打ち立て維持することは不可能だろう。

#### 歴史は統一に向かって進み続ける

モンゴル帝国はアジアとヨーロッパまで支配を伸ばしたが、やがてばらばらになった。キリスト教は何億もの人を改宗させたが、同時に無数の宗派に分裂した。ラテン語はヨーロッパ西部と中部に広まったが、やがて地域ごとに方言に分かれ、最終的に各国語になった。これらの分裂は統一へと向かうとめようもない趨勢に反する一時的な逆転にすぎない。

長期的歴史変化の過程を理解するには、鳥瞰的な視点より、宇宙を飛ぶスパイ衛星の視点を採用したほうがいい。この視点に立てば、歴史は統一に向かって執拗に進み続けていることが歴然とする。キリスト教の分裂やモンゴル帝国の崩壊は、歴史という幹線道路におけるスピードの抑止帯でしかない

アメリカ大陸とヨーロッパ大陸は歴史のほとんどの期間、別世界だった。ローマが火星にあったようなものだ。紀元前1万年ごろ、この惑星(地球)に何千もの社会があった。紀元前2000年には数百、多くても数千まで減っていた。ヨーロッパ人による大航海時代直前の1450年にはさらに激減していた。人類の9割近くがアフロ・ユーラシア大陸という単一の巨大世界に住んでいた。

今日、人類のほぼ全員が同一の地政学制度(国際的に承認された国家に分割)や、同一の経済制度、同一の法制度、同一の科学制度を持っている。この単一グローバル文化は同種のものではない。単一の有機体には多種多様な器官や細胞があるように、グローバル文化にも、多種多様な人々や生活様式がある。それでも、人類はみな緊密に結びつき、相互に影響しあっている。

グローバル文化のうちでも、ほとんどのエスニック料理は地元以外の外来の材料を使い、アメリカインディアンの登場する西部劇の馬も1942年にはいなかった。

#### グローバルなビジョン

グローバルな統一の最も重要な段階は、数々の帝国が発展し、交易が盛んになった、過去数世紀間に展開した。歴史はグローバルな統一に向かって少しずつ動いていたが、全世界を支配する普遍的秩序という概念はまだほとんどの人には馴染みがなかった。人間以外に自分が属する種全体の利益に導かれている社会的な動物はいない。

認知革命を境に、ホモ・サピエンスは見ず知らずの人と互いに協力し合うようになった。紀元前1000年ごろ、普遍的な秩序となる可能性をもったものが3つ登場し、信奉者たちは一組の法則に支配された単一の集団として全世界と全人類を想像することができた。最初の普遍的秩序は経済的なもので貨幣だった。二番目の普遍的秩序は帝国という秩序だった。三番目の普遍的宗教の秩序だった。

「私たち対彼ら」という進化上の二分法を最初に超越し、人類統一の可能性を予見したのは、貿易商人や征服者、預言者だった。貿易商人にとって全世界が単一市場であり、全人類が潜在的な顧客だった。征服者にとって、全世界は単一の帝国であり、預言者にとっては、全世界は単一の真理を内包しており、全人類は潜在的な信者だった。

過去3000年間に、人々はそのようなグローバルなビジョンを実現させようと、多くの野心的な試みを重ねてきた。

## 第10章 最強の征服者、貨幣

1519年、エルナン・コルテス率いる征服者がそれまで孤立していた人間世界の一つであるメキシコに侵入した。食べることも飲むことも出来ず、織ることも出来ず、柔らか過ぎて道具や武器には使えない金がどうして重要なのかと原住民がコルテスに尋ねると、コルテスは「なぜなら、私も、仲間たちも心臓病にかかっており、金でしか治せないから。」と答えた。

メキシコ征服の3世紀前、スペイン人はイベリア半島と北アフリカのイスラム教徒の諸王国を相手に、残酷な宗教戦争を繰り広げた。キリスト教徒が優位に立つにつれ、モスクを破壊し、教会を建設するだけでなく、十字架の印の入った新しい金貨や銀貨を発行しただけでなく、ミラーレという別の硬貨も鋳造した。その硬貨にはアラビア語で「アッラーの他に神はなし、ムハンマドはアッラーの使徒なり」と宣言されていた。これらの硬貨はカトリックの司教や敬虔なキリスト教徒さえも喜んでそれを使った。

キリスト教徒とは反対側の陣営でも、北アフリカのイスラム教徒貿易商人はフィレンツェやベネツィアの金貨やナポリの銀貨を使って交易した。また、異端者であるキリスト教徒に聖戦を呼びかける、イスラム教徒の支配者たちまでもがキリストや聖母の加護を祈願する硬貨で喜んで税を受け取った。

### 物々交換の限界

狩猟採集民には貨幣はなかった。生活に必要な品はたいてい単純な物々交換で行えた。農業革命が起こっても、これはほとんど変わらなかった。大半の人は小さなコミュニティで暮らした。だが、都市や王国が台頭し、輸送インフラが充実すると、専門化が生まれた。人口密度の高い都市では、専門の靴職人や医師だけでなく、大工や聖職者、兵士、法律家もそれぞれの仕事に専従できるようになった。

だが、専門化からは一つの問題が生じた。専門家どうしの物々交換の品物の交換をどう管理すればいいのか？ 恩恵と義務の経済は、見ず知らずの人が大勢協力しようとするときはうまくいかない。恩恵に報いることが出来ないかもしれない外国人の面倒を見る時は物々交換も可能だが、限られた製品を交換するときだけに効果的で、複雑な経済の基盤を成しえない。

農業専門の農家や製造業者から産物や製品を集め、必要とする人に分配する中央物々交換制度を確立することでこの問題を解決しようとした社会がある。ソビエト連邦で、それは惨めに失敗した。ほとんどの社会は、大勢の専門家を結びつけるための、もっと手軽な方法として、貨幣を創造した。

### 貝殻とタバコ

貨幣は多くの場所で何度も生み出された、その発達には、技術の飛躍的な発展は必要ない。それは純粋に精神的な革命だったのだ。人々が共有する想像の中にだけ存在する新しい共同主観的現実があればよかった。(貨幣の発行、制度に対する信頼があればよかった。)

貨幣というのは硬貨や紙幣とは限らない。品物やサービスを交換する目的で、他のものの価値を体系的に表すために人々が進んで使うものであれば、それはなんであれ貨幣だ。貨幣のおかげで人々はさまざまなしなものやサービスの価値を素早く簡単に比較し、交換し、手軽に富を蓄えることが出来た。現代の監獄や捕虜収容所では、タバコがしばしば貨幣として使われてきた。アウシュヴィッツの生存者は収容所でタバコが通貨として使われ、パン一塊がタバコ12本と交換されていたという。

実際、今日でさえ、貨幣と紙幣の形態としては少数派だ。2006年に全世界の貨幣の総額は合計約473兆ドルだったが、硬貨と紙幣の総額は47兆ドルに満たない。他はコンピューターのサーバーにだけ存在する。複雑な商業システムが機能するためには何らかの種類の貨幣が不可欠だ。誰もが貨幣を欲しがるのは、他の誰もが貨幣を欲しがるから。

理想的な貨幣は、人々があるものを別のものに転換することだけでなく、富を蓄えることも可能にする。富は運ぶ必要もある。貨幣はそれに応え、複雑な商業ネットワークと、活発な市場の出現に貢献した。

### 貨幣はどのように機能するのか？

タカラガイの貝殻もドルも私たちが共有する想像の中でしか価値をもっていない。その価値は、貝殻や紙の化学構造や、色、形には本来備わっていない。信頼こそ、あらゆる種類の貨幣を生み出す際の原材料に他ならない。貨幣は最も普遍的で、最も効率的な相互信頼の制度なのだ。歴史上、知られている最初の貨幣はシュメールの「大麦貨幣」だ。1リットル相当の大麦をシラという単位の通貨として使った。紀元前3000年、古代メソポタミアで、保存したり、運ぶのに簡単な貨幣として銀貨シュケルが出現した。シュケルは銀8.33gの塊だった。銀は装飾材料としての価値を持っていた。

貴金属の一定の重さが、やがて硬貨の誕生につながった。史上初の硬貨は、アナトリア西部（トルコ西部）のリュディアの王アリユアッテスが紀元前640年頃に造った。硬貨に必要な2つの重要なことは、その金属塊が貨幣であることを示す刻印があること。そして、その硬貨の価値を保証する発行者が誰かを示していること。発行者は最高権力者でなければならなかった。ローマ帝国を維持するのに硬貨は絶対に必要なものだった。

### エレクtron貨 - Wikipedia (リュディアの貨幣)



貨幣に刻印される記号の形と大きさは歴史を通してはなはだ異なるが、そのメッセージは常に同じで、「偉大なる王○○○である予は、この金属円板がきっかり5グラムの金を含むことを保証する。この硬貨を偽造するものがいたら、その者は予の署名をしているに等しく、それは予の名声に汚点を残すこととなる。そのような罪を犯す者を、予は厳罰に処する。」というものだ。

### 金の福音

ローマの硬貨に対する信頼は非常に厚かったので、帝国の国境の外でも、人々は喜んでデナリウス硬貨で支払いを受けた。「デナリウス」は硬貨の総称になった。いまなお、ヨルダン、イラク、セルビア、マケドニア、チュニジア他数か国のイスラム圏ではアラビア語となり、通貨の名称となった。

リュディア方式の貨幣制度が地中海からインド洋へと広がったころ、中国は青銅貨と無印の銀塊と金塊に基づく若干異なる貨幣制度を開発した。中華圏とリュディア圏の間には、緊密な貨幣と商業の関係が確立された。近代後期には全世界が単一の貨幣圏となり、最初は金と銀、後にはイギリスのポンドやアメリカのドルといった少数の信頼されている通貨に依存した。

と  
国や文化の境を越えた単一の貨幣圏が出現したことで、アフロ・ユーラシア大陸と、最終的には全世界が単一の経済・政治圏となる基礎が固まった。人々は互いに理解不能な言語を話し、異なる規則に従い、個別の神を崇拜し続けたが、誰もが金と銀、金貨と銀貨を信頼した。この共有信念抜きではグローバルな交易ネットワークの実現は事実上不可能だった。

非常に異なる文化に属し、たいていのことは同意できなかった中国人インド人、イスラム教徒、スペイン人が金への信頼を共有していたのはなぜか？

交易は互いにはないものの物々交換から始まり、交易を通じて交換の媒体となる金塊の価値に違いがあることに気付き、その格差を埋めるような活動は始まる。必然的に金塊の価値は収斂していく。こうして貨幣通貨は共通していく。

哲学者や思想家や預言者たちは何千年にもわたって、貨幣に汚名を着せ、お金のことを諸悪の根源と呼んできた。それは当たっているかも知れないが、貨幣は人類の寛容性の極みでもある。貨幣は言語や国家の法律、文化の規準、宗教的信仰、社会習慣よりも心が広い。貨幣は人間が生み出した信頼制度のうち、ほぼどんな文化の溝も埋め、宗教や性別、人種、年齢、性的指向に基づいて差別することのない唯一のものだ。貨幣のおかげで、見ず知らずで信頼し合っていない人どうしても、効果的に協力できる。

### 貨幣の代償

貨幣には二つの普遍的原理に基づいている。

- 普遍的転換性—貨幣は錬金術師のように、土地を忠誠に、正義を健康に、暴力を知識に転換できる。
- 普遍的信頼性—貨幣は仲介者として、どんな事業においても、どんな人どうしても、協力できるようにする。

この二つの原理のおかげで、歴大な数の見知らぬ人どうしが交易や産業で効果的に協力できるようになった。だが、この原理には邪悪な面がある。あらゆるものが転換可能で、信頼が個性のない貨幣やタカラガイの貝殻に依存しているときには、各地の伝統や親密な関係、人間の価値が損なわれ、需要と供給という冷酷な法則がそれに取って代わるのだ。



人類のコミュニティーや家族はつねに、名誉や忠誠、道徳性、愛といった「値のつけられないほど貴重なもの」への信頼に基づいてきた。それらはつねに市場の埒外にあり、お金のために売り買いされるべきでない。

貨幣は、ダム亀裂にしみ込む水のように、いつもこうした障壁を突破しようとしてきた。親は落ちぶれると、子供の何人か奴隷として売って、他の家族のために食べ物を買った。敬虔なキリスト教徒は人を殺し、盗みを働き、ごまかしをし、その後、略奪したものを使って教会から罪の許しを買った。グローバル経済への参入チケットを購入するために、部族の土地は、地球の裏側からきた異国人たちに売られた。

貨幣にはさらに、邪悪な面がある。貨幣は見ず知らず人どうしの間に普遍的な信頼を築くが、その信頼人間やコミュニティや神聖な価値ではなく、貨幣自体や、貨幣を支える非人間的な制度に注ぎ込まれたものだ。私たちは赤の他人も、隣に住む人さえも信用しない。私たちが信頼するのは、彼らの持っている貨幣だ。彼らが貨幣を使い果たしたら、私たちの信頼もそれまでだ。貨幣がコミュニティや宗教、国家というダムを崩すにつれ、世界は一つの大きい、非常に無慈悲な市場になる危険がある。

人類の経済史はデリケートなバランス芸だ。貨幣の移動と交易を長きにわたって妨げてきたコミュニティのダムを人々は一方の手で打ち壊す。だが、もう一方の手で、市場への力への隷属から社会や宗教、環境を守るために、新たなダムを築く。人類の統一を純粋に経済的な過程だけでは理解することはできない。武力の役割もけって人類の統一を純粋に経済的な過程だけでは理解することはできない。武力の役割もけって無視できない。

## 第11章 グローバル化を進める帝国のビジョン

古代ローマ人は負けることには慣れていて、ローマ人は次から次へと戦いで敗北しながら、それでも戦争には勝つことが出来た。紀元前2世紀半ばにイベリア半島北部の土着ケルト人の小さい山の町ヌマンティアがローマの支配から抜け出そうとして、戦いになった。

ヌマンティアは外界との接触を断たれ、1年以上が過ぎ、糧食が尽きた。ヌマンティア人は自らの町に火を放ち、住民のほとんどがローマの奴隷になるのを嫌って自決した。後に、ヌマンティアはスペインの独立と勇敢さの象徴となった。スペインの愛国者たちがヌマンティア人をほめそやすとき使うのはヌマンティア人のケルト語ではなく、ローマ人のラテン語の系統のスペイン語だ。ヌマンティアに対するローマの勝利が完璧だったため、勝者は敗者の記憶までも取り込んだ。

これは勝ち目の薄い者が勝つのが好きだ。だが、歴史には正義はない。過去の文化の大半は遅かれ早かれどこかの無慈悲な帝国の餌食になった。

### 帝国とは何か？

帝国とは、二つの重要な特徴を持った政治秩序のことをいう。

第一は、それぞれが異なる文化的アイデンティティと独自の領土を持った、いくつもの個別の民族を支配していることだ。第二に、帝国は変更可能な境界と潜在的に無尽の欲を特徴とする。

文化的多様性と領土の柔軟性のおかげで、帝国は独特の特徴を持つばかりでなく、歴史の中で自らの中心的役割も得る。帝国はその由来や統治形態、領土の広さ、人口によってできるだけでなく、文化の多様性と、変更可能な国境によってもつぱら定義される。

帝国は軍事的征服によって出現する必要はない。アテネ帝国は自主的な同盟として始まり、ハプスブルク帝国は一連の婚姻同盟によって生まれた。帝国は独裁的な皇帝に支配される必要もない。大英帝国は民主政体によって支配されていた。オランダ、フランス、ベルギー、アメリカは民主制の近代の帝国や、ノヴァゴロド(ロシア西部)、ローマ、カルタゴ、アテネといった近代以前の帝国がある。

[ノヴァゴロド - Wikipedia](#)

大きさも関係ない。アテネ帝国は全盛期でさえ、現代ギリシアよりも大きさも、人口も格段に小さい。アステカ帝国は今日のメキシコよりも小さい。アテネは独立していた100以上の都市国家に君臨し、アステカ帝国は371の異なる部族や民族を支配していた。

帝国は人類の多様性が激減した大きな要因だ。帝国というロードローラーが、数限りない民族の特徴を徐々に跡形もなく踏みつぶし、そこから新たなはるかに大きい集団を作り上げていった。

## 悪の帝国？

今の時代、政治的な罵り言葉のうち「ファシスト」を除けば、最悪なのは「帝国主義者」だろう。帝国に対する現代の批判は、普通二つの形を取る。

1. 帝国は機能しない。長期的には、征服した多数の民族を効果的に支配するのは不可能だ。
2. たとえ支配できても、そうするべきではない。帝国は破壊と搾取の邪悪な原動力だ。どの民族も自決権を持っており、けっして他民族の支配下に置かれるべきではない。

歴史的な視点に立つと、最初の批判は全くナンセンスで、二番目の批判は大きな問題を抱えている。

帝国は過去2500年間、世界で最も一般的な政治組織だった。この2500年間、人類はほとんど帝国で暮らしてきた。帝国は非常に安定した統合形態でもある。大半の帝国は反乱を簡単に鎮圧してきた。一般に帝国は外部からの侵略や、エリート支配層の内部分裂によってのみ倒された。征服された民族は、帝国からの支配からはめったに逃れられなかった。そうして固有文化は消えた。

476年に、西ローマ帝国がゲルマン人に倒されたあと、それまで支配されていた民族が復活することはなかった。多くの場合、一つの帝国が崩壊しても、支配下にあった民族は独立出来なかった。同じことが中東でもあった。支配者が次々に代わって、最後の支配者の西洋文化が残った

帝国を建設して維持するにはたいてい、大量の人を残忍に殺戮し、残りを容赦なく迫害する必要がある。帝国の標準的な手駒には、戦争、奴隷化、国外追放、組織的大量虐殺などがあった。一方、帝国のエリート層は征服から得た利益を軍隊や砦のためだけでなく、哲学や芸術、道義や慈善を目的とする行動にも回した。ローマ帝国のもと、キケロ、セネカ、聖アウグスティヌスは思索や著述が出来た。タジマハールはムガル帝国のもとで建造され、ハイドンやモーツァルトはハクスブルク帝国のもとで活動出来た。

## これはお前たちのためなのだ

最初の帝国はサルゴン一世のアッサド帝国(紀元前2250年頃)だ。 [アッカド帝国 - Wikipedia](#) アッサド帝国は長続きしなかったが、その後を継ぐ者は1700年間、アッシリア、バビロニア、ヒッタイトの王たちはサルゴンに倣い、自分も世界を征服したと豪語した。紀元前550年ごろ、ペルシャのペルシャのキュロス大王は全世界を支配しているだけでなく、あらゆる人のためにそうしていると主張した。「お前たちを征服するのは、お前たちのためだ。」とペルシャ人たちはいった。キュロスは隷属させた民族が彼を敬愛し、パエルシャの従属者であって幸福だと思ふことを望んでいた。

進化の結果、人類は他の社会的動物と同様に、よそ者を嫌う生き物になった。サピエンスは人類を「私たち」と「彼ら」という二つの部分に本能的に分ける。

民族的排他主義とは対照的に、キュロス以降の帝国のイデオロギーは、包括的・網羅的傾向位を持っていた。このイデオロギーは、支配者と被支配者の人種的違いや文化的違いを協調することも多かったが、人類が一つの大きな家族とみていたから、親の特権は子供の福祉に対する責任と切り離さないでいた。

この新しい帝国のビジョンは、ヘレニズム時代の王や、ローマの皇帝、イスラム教国のカリフ、インドの君主、最終的にはソヴィエト連邦の首相やアメリカの大統領へと引き継がれた。同じような帝国のビジョンは、世界の他の場所でも独自に発達した。目覚ましいのは中央アメリカとアンデス地方と中国だ。伝統的な中国の政治理論によれば、天は、地上の一切の正統な権威の源だという。天命は何人かの候補者に同時に下されることはあり得ない。二つ以上の独立国の存在は正当化できないとした。帝国時代は秩序と正義の黄金時代と見なされた、公正な世界は個別の様々な国民国家から成るという近代の西洋は逆で、政治的分裂の時期は、混沌と不正の暗黒時代と見なされた。

## 「彼ら」が「私たち」になるとき

多数の小さな文化を少数の大きな文化にまとめる過程で、帝国は決定的な役割を果たした。政治的に分裂した地方でよりも帝国の国境内の方が簡単に広まった。帝国自体が意図的に思想や制度、習慣、規範を広めることも多かった。帝国が共通の文化を積極的に広めたのは、正統性を獲得することだった。キュロス大王、始皇帝以降、道路の建設であれ流血であれ、帝国は自国の行動は、征服者よりも被征服者の方が大きな恩恵を受けるよう、優れた文化を広めるのに必要なこととして正当化してきた。

ほとんどの帝国のエリート層は、帝国の全住民の全般的な福祉のために働いていると、本気で信じていた。中国の支配階級は、近隣の人々や外国の臣民のことを、自らの帝国が文化の恩恵をもたらしてやらなければならない惨めな野蛮人として扱った。ローマ人も、野蛮人に平和と正義と洗練性を与えるのだと主張して、自らの支配を正当化した。

帝国によって広められた文化の概念は支配者のエリート層が生み出したものはめったになかった。帝国はたいがい、支配していた諸民族から多くを吸収した混成文明を生み出した。ローマの帝国文化はローマ風であると同時にギリシア風でもあった。アッバース朝の帝国文化は、一部がペルシャ風、一部がギリシア風、一部がアラビア風だった。19世紀後半、教養あるインド人がイギリス文化を完全に身につけ、ロンドンで学び、法廷弁護士になったが、南アフリカで差別されて列車から放り出された。ガンジーだった。

文化変容と同化の過程を通して、新参者と旧来のエリート層を隔てる壁が最終的に崩れる場合もあった。征服民は、もはや帝国を異国人による占領制度とは見なさず、征服者も支配民を自分と対等に眺めるようになった。支配者も被支配者も同じように「彼ら」を「私たち」と見るようになった。ローマに支配された人々も何世紀にもおよぶ帝国の支配の後、ついにローマ市民権を与えられた。非ローマ人がローマ軍団の将校団の上位に達し、元老院議員に任命された。

同じようなことがアラブ帝国でも見られた。中国では、帝国化の事業はさらに徹底した成功を収めた。中国の帝国が成し遂げた究極の偉業は、この帝国が今なお元気そのものであることだ。チベットや新疆のような辺境以外では中国を帝国と見るには難しい。(この地域が帝国活動の最前線最盛地区か)中国の人口の9割以上が、自分は漢民族だと考えており、他者もそう思っている。

20世紀を通して、西洋の価値観を採用した非西洋地区ではこれらの価値観の名において、ヨーロッパ人の征服者と対等の地位を要求した。

### 歴史の中の善人と悪人

歴史を善人と悪人にすぱっと分け、帝国はすべて悪人の側に入れるのは魅力的だ。帝国の対多数は血の上に築かれ、迫害と戦争を通して権力を維持してきた。今日の文化の大半は、帝国の遺産に基づいている。もし、帝国を悪と決めつけると、私たちはどのような存在となるのか？帝国誕生以前の「純正」な文化を再建し、保護することを願っても、残酷な帝国の遺産を完全に拒否することにしても、それで守られるのはさらに古くて、同じくらい残酷な帝国の遺産以外の何物でもない可能性が高い。

### 新しいグローバル帝国

紀元前200年ごろから、人類のほとんどは帝国の中で暮らしてきた。将来も、やはり人類の大半は帝国の中で暮らすだろう。将来の帝国は真にグローバルなものとなる。全世界に君臨するという帝国主義のビジョンが、今や実現しようとしている。

21世紀が進むにつれ、国民主義は急速に衰えている。次第に多くの人が、特定の民族や国籍の人ではなく全人類が政治的権力の正当な源泉であると信じ、人権を守ることが政治の指針であるべきだと考えるようになってきている。200近い独立国があるということは、その邪魔にこそなれ、助けにはならない。

2014年の時点で、世界はまだ政治的にばらばらだが、国家は急速にその独立性を失っている。独立した経済政策を実施したり、好き勝手に宣戦布告して戦争したり、自ら適切と判断する形で内政を実施したりすることさえも、本当にできる国は一つもない。国家はグローバル市場の思惑や、グローバル企業やNGO(非政府機関)の干渉、グローバルな世論や国際司法制度の影響をますます受けやすくなっている。

生まれつつあるグローバル帝国は、特定の国家あるいは民族集団によって統治されはしない。後期のローマ帝国とよく似て、他民族のエリート層に支配され、共通の文化と共通の利益によってまとまっている。帝国の呼びかけに応じるか、自分の国家、民族に忠誠を尽くし続けるかを考えなければならなくっている。

## 第12章 宗教という超人的秩序

中世の中央アジア、サマルカンドの市場は東西南北の交通の要衝の一つとなり、人類統一は日々の現実であった。1281年、フビライ・ハーンが日本に侵入するために、モンゴル人、中国人、朝鮮人が集結したとき、彼らの誰もが皇帝の命令に従った。

一方、メッカのカーバ神殿での周りでは、別の方法で、人類統一が進んでいた。メソポタミアから、アジアのステップから、トルコから、アフリカのマリからやってきたイスラム教徒の一団がいた。

今日、宗教は差別や意見の相違、不統一の根源と見なされることが多い。じつは、貨幣や帝国と並んで、宗教もこれまでずっと、人類を統一する三つの要素の一つだった。社会秩序とヒエラルキーは想像上のものだから、みな脆弱であり、社会が大きくなればなるほど脆くなる。宗教はこうした脆弱な構造に、超人的な正統性を与えることだ。宗教は超人的な秩序の信奉に基づく、人間の規範と価値観の制度と定義できる。これには二つの異なる規準がある。

1. 宗教は、超人的な秩序の存在を主張する。サッカーは宗教ではないのは、いつでも人間によってルールは変えることができる。
2. 宗教は、超人的秩序に基づいて規範や価値観を確立し、それに拘束力があると見なす。死者の霊や、妖精の存在、生まれ変わりを信じることは、行動の規準にはなりえないので、これは宗教ではない。

宗教が本質的に異なる人間集団が暮らす広大な領域を傘下に統一するためには、さらに二つの特性を備えなければならない。第一は、普遍的な超人間的秩序を信奉していること。第二は、この信念をすべての人に広めることを求めなければならない。宗教は普遍的であると同時に、宣教を行うことを求められる。

古代の宗教の大半は、局地的で排他的で全人類を改宗させる意図は持っていなかった。普遍的で宣教を行う宗教が現れたのは、紀元前1000年頃で、普遍的な帝国や貨幣の出現と同じように人類の統一に不可欠の貢献をした。

### 神々の台頭と人類の地位

アミニズムが最も有力な信念体系だった狩猟採集民にとって、人間の規範と価値観は、動植物や妖精、死者の霊といった他の無数の存在の見地や利害を考慮に入れざるを得なかった。

農業革命には宗教革命が伴っていたらしい。狩猟採集民にとって野性の動植物は人間と対等の関係を持っていたが、農業革命によって野性の動植物は家畜化、栽培化され、人間との対等な関係から資産となり、家畜の無病多産、栽培の豊作、豊穰を願って祈るものが数多く想像されてきた。

こうして多神教が生まれた。

### 偶像崇拜の恩恵

今日まで、2000年にわたって、一神教による洗脳が続いたため、西洋人は多神教のことを無知で子供じみた偶像崇拜と見なすようになった。だが、これは不当な固定概念だ。多神教は全宇宙を支配する単一の神的存在や法の存在に必ずしも異議を唱えるわけではない。それどころか至高の神的存在を認めていた。しかし、それらの神的存在は世界を支配するとは考えなかった。多神教徒は巨大な帝国を征服したときにさえ、被支配民を改宗させようとはしなかった。多神教のローマ人が殺害したキリスト教徒はキリストが十字架に架けられてからの300年間に数千人だったが、その後の1500年間に同じキリスト教徒を何百万人も殺戮した。

### 神は一つ

多神教の信者の一部は自分の守護神を大いに気に入ったので、多神教の基本的な考えかたから次第に離れていった。彼らは自分の神が唯一の神で、その神こそが宇宙の至高の神的存在であると信じ始めた。彼らは、その神は自分たちに関心を持ち、神はえこひいきすると考え続け、その神と取引できると信じていた。こうして局地的段階の一神教は各地で生まれた。

ユダヤ教の小さな宗派のパウロはキリストがユダヤ人だけでなくすべての人のために生まれ、十字架に架けられたのなら、あるゆる人がイエスの言葉を世界に広めるべきだと考えた。パウロの主張は大き実を結んだ。キリスト教徒は全人類に向けて、広範な宣教活動を始めた。イスラム教も世界の片隅で小さな宗派として始まったが、不思議で素早い、意外な展開でアラビアの砂漠から大西洋、インド洋にまで広がる巨大な帝国を征服した。 — 8/10 —



## 善と悪の戦い

多神教は一神教だけでなく、二元論の宗教も生んだ。二元論の宗教は、善と悪という、二つの対立する力の存在を認めている。二元論では、悪の力は独立した力であり、善き神に創造されたものでも善き神に従属するものではないと信じられている。全宇宙はこの二つの力の戦場で、世界で起こることのすべてはその争いの一部だと説明される。

二元論の宗教は紀元前1500年ころから紀元前1000年までのゾロアスター教はササン朝ペルシャ(224年~651年)の国教となった。その影響を受けたマニ教は3世紀と4世紀に中国から北アフリカにまで広まった。 <https://ja.wikipedia.org/wiki/二元論>

.....

## 自然の法則

自然法則を信奉する古代宗教のうち最も重要なのは仏教で、いまなお主要な宗教であり続けている。仏教の中心的存在は神ではなく、ゴータマ・シッダールタという人間だ。人間の苦悩の本質や原因、不運、社会的不正義は神の気まぐれで生じるのではなく、本人の心の振る舞いの様式から生じると悟った。

彼は自分の教えをたった一つの法則に要約した。苦しみは渴愛(執着)からうまれるので、渴愛から完全に解放されることであり、そのために、心を鍛えて現実をあるがままに経験(認識)することだと。仏教は神々の存在を否定しない。幾つかの宗派は様々な仏や菩薩を生み出した。

## 人間の崇拜

過去3000年間は、宗教が次第に重要性を失って、世俗主義の高まりとして描かれることが多い。もし、有神論の宗教のことを言っているのなら、それはおおむね正しい。しかし、自然法則の宗教も考慮にいれれば、近代は強烈な宗教的熱情や前例のない宣教活動、史上最も残酷な戦争の時代ということになる。

すべての人間至上主義者は人間性を崇拜するが、人間性の定義に関しては意見が3つに分かれる。今日最も重要な人間至上主義は自由主義である。個々の人間の内にいる心が、世界に意味を与え、すべての倫理的・政治的権利の源泉となる。これをまとめて「人権」という。

社会主義的な人間至上主義では、社会主義者は「人権」は個人的なものではなく、集合的なものだとしている。それを「平等」と言っている。

残りの一つは人間の進化論的な人間至上主義である。人類は普遍ではなく、進化も、退化もあり、変化しやすいものだという。ナチスの最大の野望は、人類を退化から守り、漸進的進化を促すことだった。・・・ヒトラーに対する戦争の終結からの60年間は、人間至上主義と進化論とを結びつけ、生物学的方法を使って、ホモ・サピエンスを「アップグレード」することを提唱することはタブーだった。だが、今日、そのような事業が再び流行している。

## 第13章 歴史の必然と謎めいた選択

交易と、帝国と普遍的宗教のおかげで、事実上、すべての大陸のすべてのサピエンスは最終的に、グローバルな世界に到達した。だが、グローバルな世界が必然的だったということではない。もし、1万年前に戻って、何度も一からやり直したら、毎回必ず一神教が台頭し、二元論が衰退することになるのだろうか。

## 後知恵の誤謬

4世紀初頭、ローマ帝国の眼前には様々な宗教的選択肢があった。マニ教、ミトラ教、イシスあるいはキュベレのカルト、ゾロアスター教、ユダヤ教、さらに仏教さえも選択肢に入っていた。にもかかわらず、コンスタンティヌスはなぜキリスト教を選んだのか？ 歴史学者はキリスト教がどのようにローマ帝国を席卷したかは詳述できても、なぜキリスト教だったかを説明できない。

その時代の人にとって、とうていありそうでないと思える可能性がしばしば現実になることは強調しておかなければならない。

歴史は決定論ではないことを認めれば、ほとんどの人が国民主義や資本主義、人権を信奉するのはただ、偶然だと認めることになる。

歴史は「二次」のカオスなのだ。天気は「一次」のカオス系で、無数の要因で変化するものの、コンピューターモデルの構築でますます正確な予報を行える。二次のカオス系はそれについての予想に反応するので、正確に予想することは決してできない。市場は二次のカオス系だ。政治も二次のカオス系だ。予想可能な革命は決して起きない。

なぜ、歴史を研究するのか？物理学や経済学とは違い、歴史は正確な予想をするための手段ではない。歴史を研究するのは未来を知るためではなく、視野を拡げ、現在の私たちの状況は自然なものではなく、必然的なものでもなく、私たちの前には、想像しているよりもずっと多くの可能性があることを理解するためだ。

#### 盲目のクレイオ(ギリシア神話・歴史を司る女神)

歴史の選択は人間のためではない。歴史は進むにつれて、人類の境遇が必然的に改善されるという証拠はまったくない。歴史が人類の利益のために作用しているという証拠がないのは、そのような利益を計測する客観的の尺度がないのは、良い悪いの定義が文化によって異なるからだ。

文化は一種の精神的感染症あるいは、寄生体で、人間はその宿り主になっているという学者が2014年の時点で、世界はまだ政治的にばらばらだが、国家は急速にその独立性を失っている。文化を精神的な寄生体とする考え方をミーム学と呼ばれる。ミーム学の双子の兄弟としてポストモダニズムがある。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ミーム学>

<https://kotobank.jp/word/ポスト・モダニズム>

歴史は何らかの謎めいた理由から選択を行って、まずこちら、次にこちらというふうにさまざまな道筋をたどり、一つの時点から次の時点へと進んでいく。西暦1500年ころ、歴史はそれまでで最も重大な選択を行い、人類の運命だけでなく、おそらく地上のあらゆる生命の運命をも変えることになった。私たちはそれを科学革命と呼ぶ。

(第3回目は以上・T.K記)

人類の一集団がアフリカを出てユーラシア大陸へ進出したとき、東へ向かったのはアジア人、日本人の先祖となり、西に向かったのはヨーロッパ人の先祖だった。その時から、言語、思考法、文化の差が拡がって、現在に至っていると考え、世界の対立はそんなに簡単に解消するようには思えません。

二元論は人間の思考パターンの根源とも、宿命とも言えます。

好きか嫌いか、得か損か、善か悪か、白か黒か、男か女か、大人か子供か……

本当はこれらの両極端の間に無段階な変化があるにもかかわらず、いちいち、正確にそれらを言葉で表現しようと思うと大変な努力と苦勞と時間を費やさなければならなくなり、言語経済学では大変な無駄なこととなり、人間は無駄をきらって、簡単にすませようとする。

人間の言語は面的でもなく、立体的でもなく、線的な流れで進みます。

デジタル信号も二元的ではありますが、面的にも、立体的にも、さらには多次元空間さえ表現することが出来ます。人間は色彩を三次元の空間として色立体として認識できますが、言葉で色の名前を表現するには限界があります。色彩を表現するには余りにも貧相な語彙しか持ち合わせていません。色彩感覚の鋭い人は色彩をあるがままに認識し、言葉では表現しません。あるがままに認識し、直接色彩を使います。文学者は言葉の限界、語彙の限界越えるのに、言葉でしか越えることはできません。音楽や美術がもっている可能性は、言語の持つ可能性とは違えます。…この要約にも限界があります。

(T.K.)